

モンゴルにおける女性の役割と男性の失業の問題について

モンゴル国立大学経済学部准教授
ナラントヤ・ダンザン

要旨

本研究の目的は、この100年間に生じた文化・政治・経済・社会面における変化によって、モンゴル人男女の役割と失業問題がどのように変化してきたかを検討することである。本研究を通して、封建主義、社会主義、資本主義という3つの異なる社会体制における仕事のジェンダーモデルが比較される。本研究は、量的アプローチと質的アプローチを組み合わせることでこの課題に取り組み、経済学、社会学、歴史学の観点から洞察を与える。

キーワード：モンゴル、男性の役割、女性の役割、一家の稼ぎ手、失業

JEL classification: E24, N15, Z13

1. 目的と方法

本稿の目的は、父系制から両系制への歴史の変遷をたどり、封建制から社会主義へ、また社会主義から資本主義への転換の過程で、モンゴル人男女の家庭内の役割がどう変化してきたか、また、この変化が男性の失業にどう反映されたかを明らかにすることである。

この研究のために、公式統計、政策文書、雇用調査、社会・ジェンダー・暴力に関する資料、理論研究も含む労働とジェンダーに関する先行研究を利用する。さらに、資料や統計の分析を、信仰・社会の変化・家庭生活・幸福に関して2002年、2003年、2016年に実施したインタビュー調査とオーラルヒストリーの情報によって補完する。

58人に関して各人の歴史を聞き取り（オーラルヒストリー）、さらに、背景が異なる20組の夫婦に綿密なインタビューを行った。情報提供者はすべて自薦・ボランティアでインタビューに参加している。家庭における男性の役割とジェンダー関係を調査する際に、これらの手法の優位性により、各人がどのように感じているかを明らかにすることができる。

2. モンゴル人家庭における男女の役割：1919～2019年

(1) 封建制時代

20世紀初頭まで、90%のモンゴル人にとって家畜が最も重要な生活の資源であった。モンゴルでは数百年にわたって、仏教が支配的な宗教であった。

モンゴルは家長制の父系制社会であった。一般に、伝統的なモンゴル人家庭では、男性に大きな敬意が払われる。妻は夫を、若年者や同輩を意味する「おまえ」（chi）ではなく、年長者や尊敬すべき人物を意味する「あなた」（ta）と呼んだ。女性は、家長である男性に家事に触れさせず、ごみ捨てさせなかった。家長の男性は最も大事にされた。女性はこれを伝統とみなし、社会学が言うところの家庭内の「政治行動」に対して全く影響しなかった。モンゴル人女性は、夫や離婚を選択でき、中央アジアや東アジア諸国の女性と比べて、家庭内外でより大きな自由をもっていた（Narantuya, 2008, pp.65-66）。

主な教育は男子のみが受けることができ、宗教教育であった。女子は家事の訓練を受け、料理、乳製品の作り方、縫製といった生産的な活動に従事した。牧畜は男性よりも女性や子供に依存して営まれた。広い領域にばらばらに住む遊牧民の家庭では、男性が一家の稼ぎ手であるという伝統的なモデルではなく、「男性は保護者、女性は生産者」というモデルが機能し

ていた。男女は互いに依存していた。

(2) 社会主義時代

1921年に成立したモンゴル人民政府と革命政党は、モンゴルを社会主義的発展志向をもつ社会へと導いた。1920年代中盤以降、様々な政策措置が実行され、遊牧民の信念・価値観・理念が形作られた。新政府は、書面や口頭で世代間において伝承される姓と家系図の使用を禁じた。以降、父の名が姓として用いられ、姓が世代ごとに変わるようになった。革命家らが姓を廃止した目的は、新世代を封建制の祖先から切り離すことにあり、それはさほど難しくはなかった。文化・政治エリートの親類は、高い抑圧のリスクに直面したからである。モンゴル人は姓を失っただけでなく、略記するようになった。姓を用いず、蓄財の機会もなかったため、「男性相続者」は重要視されなくなった。

モンゴル経済は牧畜から徐々に移行し、都市化、製造業の発展、教育の拡大が加速的に進展した。政府と人民革命党（共産党）は、モンゴルにおいて社会主義工業化を推進するためにできる限りの動員を行った。社会主義体制と出生増進政策の下での生活は、家庭内に少なくとも2人の稼ぎ手を必要とし、25歳までの結婚が奨励された。社会主義国家は、公的児童施設で女性を支援し、子供が生後45～56日になった時に母親は仕事に復帰するように求められた。これは「2人の稼ぎ

手と国家支援」モデルと呼ばれる (Pfau-Effinger, 1998)。

最近まで、多くのアジア社会は女性が公的分野で働くことを奨励してこなかった (Edwards and Roces, 2000; Mann, 2005)。1980年代になり、製造業が発展すると、安価な労働力が不足し、アジアの既婚女性が労働市場に参入するようになった。これはかつては難しかったことだ。ただし、日本や韓国といった父家長制社会は女性を軽視する傾向がある。

アジア社会とは異なり、モンゴル人女性が外で働くようになるにつれて、その社会的地位も向上した。1989年にはモンゴル人女性の識字率は95%になり、85%の女性が働いていた。社会主義社会は、女性の労働を可能にし、社会経済的地位とジェンダー関係を再構築した。1980年代までに、夫婦共働きであり、ともに良い教育を受けた家庭では、男性は家事労働を分担するようになっていた。ただし、男性が女性に優先されるという状況がなお一般的であった。農村生活から都市生活へ、父系制から両系制への歴史的な変遷は、主に社会主義時代の最後の30年間に生じた。結婚は、党や青年組織によって管理されており、比較的安定していた。

社会主義国家は、国民に社会福祉を与える主体として振舞ったが、私的財産を蓄える機会を与えることはなかった。モンゴルは平等主義社会であり、潜在的なパートナーの物質的な資本は重視されなかった。

社会主義の下では、「男性は稼ぎ手、女性は稼ぎ手」モデルと「男性=女性」モデルが機能にしていた。

(3) 資本主義時代

社会主義国家が終焉した後に、市場化、メディアの発達、広告、人口移動が生じた。その結果、簡素かつ非物質主義的な生活は徐々に変化しはじめた。1989年に民主化の波が起き、68年間におよぶ共産党の一元支配は終了した。以降、モンゴルの自由化と民主化が進化した。

しかし、突然の政治的変化と経済移行は、モンゴル人に多くの問題を突きつけた。貧困、失業、腐敗、福祉の悪化といった問題である。かつては無償で市民に提供さ

れていた保健・教育・社会支援の分野で、日常生活の商品化が生じた。このような変化は、ヴェブレン (Veblen, 1902) が述べているような、武勇や勤勉な仕事よりも富が社会的尊敬の基礎となる状況を生み出したといえる。そこでは富の多さによって、社会的地位が上昇する。

市場経済移行の最初の20年間で、商品ニーズが加速的に拡大したが、悪化した経済状況において興味深い、稼げる仕事を探すことは多くの人にとって難しかった。この厳しい時期に、女性は男性よりも早く力を取り戻した。大卒者を含む数千人もの女性が、非公式の小ビジネスに移ったのである。1990年代に、多くの女性が安い品物を購入してモンゴルで再販するために、子供の世話を夫に任せ、近隣国を旅行した。男性は失業への適応が難しかった。男性は女性よりも雇用の心理的機能を惜むからである (Harding and Sewel, 1992, pp.269-275)。さらに、夫は公には家長と称するが、以前のように家庭の君主として扱われることはほとんどなかった。

無職男性は尊厳を失い、それをアルコールで慰める傾向がある。アルコール中毒は自分と家族の寿命を縮めてしまう。モンゴル国立大学の社会学者が2004年に実施した調査によると、夫婦の主な離婚理由は、家庭の経済条件と「凍り切った愛情」である。

このような状況の中で、男子よりも女子が子供に持つ方が良い、という考えが出てきた。女子は心理的にだけでなく金銭的にも両親をサポートしてくれる可能性がより大きいからである。最新のデータでは、高等教育機関の学生の約60%は女性である。さらに、4世紀にわたって男性が主に教育を行い、教育を受けていた時代から、女性が子供や若者の教育により大きな影響を与える傾向にある現代の状況へと大きな変化が生じた。

家庭において女性の役割が大きくなり、「男性は稼ぎ手、女性は稼ぎ手」モデルが広まっている。

3. ジェンダーの干渉

このような状況の中で、1990年代になり、主に女性の地位向上を目的とするジェ

ンダー・プログラムや政策がモンゴル社会に導入され始めた。

全体的傾向として、以前よりも移行期の女性の地位は多くの学術的な関心を集めるようになってきている。女性問題の主な研究として、「モンゴルの女性」 (Bern and Oyuntsetseg, 2001)、「モンゴルの経済移行におけるジェンダー問題」 (Robinson and Solongo, 1999)、「移行期のモンゴル人女性の経済的地位」 (Information and Research Center for Women, 1998) が挙げられる。これらは「時間的制約の下で生み出された」 (Bern and Oyuntsetseg, 2001, p.80)。

ジェンダー・プログラムは2000年代に増えたが、学術議論にしっかりと取り上げられてこなかった。文化的な変化や、なぜマクロレベルで男性の優位が続き、政治・経済の自由化にも関わらず女性の政治参加が低下し、一方で、家庭内の男性の影響力が弱まったか、を説明しようとする議論は十分ではない。この説明には、文化の持続/断絶や、社会主義、資本主義、近代化とグローバル化といったイデオロギー面の最近の状況と結びついたより深い変化を検証する社会的、経済的、歴史的な観点が必要になる。

一方で、ポスト社会主義期のモンゴルで実施されたジェンダー・プログラムは、女性のエンパワメントを重視している。「ジェンダーに基づく暴力」調査 (National Statistics Office and the UN Population Fund, 2018) は主に家庭内暴力の女性被害者に焦点を当てたサーベイである。ある女子学生は、自身のレポートにおいて、「現代の若者にとって『ジェンダー』とは、女性の権利に関する問題、または自分の権利を保護したいと望む女性グループの問題である、と理解される」と記している (Ministry of Labor and Social Protection and Gender Consortium of Mongolian Higher Education Institutions, 2017, p.6)。

さらに、「男性稼ぎ手」モデルや「仕事 vs ジェンダー」モデル (Feldberg and Glenn, 1979) に基づくジェンダー活動は、1世紀にわたって女性が生産者であり稼ぎ手である社会において、行われてきた。その影響として、2008年から2012年まで

は男性の失業率は女性を平均0.64ポイント上回っていたが、2014年から2018年において差の平均は1.82ポイントへと拡大した。

女性の所得が増加したという意見もある。しかし、苦しんでいる男性と比べて、彼女たちがより幸福であったというわけではない。2000年代に男性の自殺率は女性の5倍以上になり、1990年代以降、寿命の男女差が拡大している。平均寿命の男女差は世界全体では約4歳であるが、2018年のモンゴルでは9.7歳である。

筆者によるインタビュー調査から得られた発言は、モンゴル家庭のジェンダー関係が、この30年足らずでどう変わったかを結論づける役に立つ。43歳の既婚女性（2016年時点）は、「私は不幸でない…

幸福といえるかもしれない。家族の誰一人として病気に苦しんでいないから。私は夫と何年も一緒に住んでいる。私は家庭で日常生活のあらゆることを指揮する。夫は熱心ではないし、上手く決められない。時々、夫が私の支えになって、物事を決めて、家庭生活をリードしてくれれば、と思うことがある」と語った。

そこに住む人々、考え方、歴史をしっかりと調査せずに経済・文化プログラムを導入することは、長期的な利益にも関わらず、社会に混乱をもたらす。政府はその対策を実施してきた。ジェンダー平等や女性に向けた政策文書とともに、2014～2018年において「男性の健康のための国家戦略」が承認された。「男性に安定した所得を与える」ために措置を講じな

ければならないこと、「家庭の安定をむしろ、離婚率を上昇させ、暴力への寛容を増進させること、家庭内暴力の被害者の保護やケア・支援がないこと、女性の羊飼いの支援メカニズムがないことは、緊急の対策を要する問題である」ということが認められた（Ministry of Labor and Social Protection et al., 2019, pp.11-12）。

4. 結論

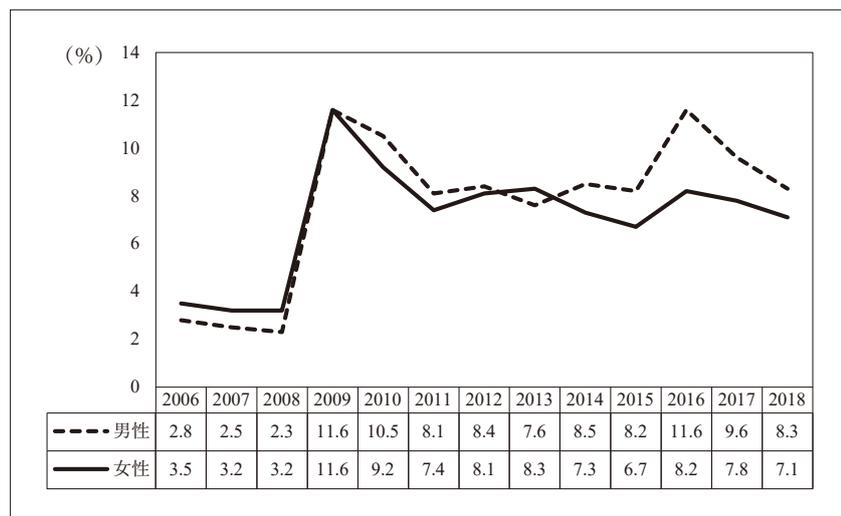
20世紀後半まで、モンゴルは家父長制の父系社会であった。伝統的なモンゴル家庭では、男性に大きな敬意が払われていた。1921年に成立した革命政府は、様々な施策やキャンペーンを実施し、牧畜社会を、羊飼い、労働者、インテリから構成される新しい社会へ、父系制から両系制の社会へと作り変えた。1980年代末まで、同様に教育を受けた男女はともに賃金を得る職場で働き、家庭内において等しい役割を担っていた。

1989年に生じた民主化の波は、20世紀のモンゴルにもう一つの変化をもたらした。1990年代以降、女性中心のジェンダープログラムがモンゴル社会で実施されるようになった。歴史の特定の時期の特定の社会に適応される伝統的な「男性稼ぎ手」モデルは、女性が数十年稼ぎ手であり、移行期には男性よりも活発に活動したポスト社会主義期のモンゴルにおいて、ジェンダー活動のために利用されてきた。女性に焦点を絞ったジェンダー活動が始まって20年以上たった現在、女性の失業率は男性を2014～2018年平均で1.82ポイント下回っている。女性の所得は増え、力も強くなった。しかし、役割と尊厳を失った男性と生活するとき、女性は幸せを感じてはいない。

さらなる政策を実施していくために、質的な調査が必要である。

[英語原稿をERINAにて翻訳]

図 モンゴルの男女別失業率



出所: National Statistical Committee (2019).

表 モンゴルの男女別平均寿命(歳)

	1995	2000	2005	2010	2018
全体	63.78	63.2	65.2	68.1	70.19
男性	62.1	60.4	62.1	64.9	66.11
女性	65.43	66.1	68.6	72.3	75.78

出所: National Statistical Committee (2019).

<参考文献>

- Bern, N. and O. Oyuntsetseg (2001) *Women in Mongolia. Mapping Progress under Transition*. Ulaanbaatar.
- Edwards, L. and M. Roces (ed.) (2000) *Women in Asia: Tradition, Modernity and Globalization*. Ann Arbor.
- Feldberg, R. L. and E. M. Glenn (1979) "Male and Female Job versus Gender Model in the Sociology," *Social Problems*, Vol. 26 (5).
- Harding, L. and J. Sewel (1992) "Psychological Health and Unemployment Status in an Island Community," *Journal of Occupational and Organizational Psychology*, Vol. 65.
- Information and Research Center for Women (1998) *Economic Status of Mongolian Women in Transition*. Ulaanbaatar.
- Mann, S. (2005) *East Asia: China, Japan, Korea. Women's and Gender History in Global Perspective*. AHA.
- Ministry of Labor and Social Protection, National Committee of Gender Equality, ADB, and Japan Fund for Poverty Reduction (2019) *Mongolia Gender Situational Analysis: Advances, Challenges and Lessons Learnt since 2005*. Ulaanbaatar.
- Ministry of Labor and Social Protection, and Gender Consortium of Mongolian Higher Education Institutions (2017). *Gender-Based Violence and Cooperation in Its Prevention. Research Conference for Students*, No 3. Ulaanbaatar. (モンゴル語文献)
- Narantuya, D. (2008) *Religion in 20th Century Mongolia: Social Changes and Popular Practices*. VDM Verlag Dr. Muller.
- National Statistics Office and the UN Population Fund (2018) *Breaking the Silence for Equality: 2017. National Survey on Gender Based Violence*. Ulaanbaatar.
- National Statistical Committee (2019). *Statistical Data Bank*. Available at: <http://www.1212.mn>.
- Pfau-Effinger, B. (1998) "Gender Cultures and the Gender Arrangement: A Theoretical Framework for Cross National Gender Research," *Innovation: The European Journal of Social Science Research*, Vol. 11(2), pp. 147-166.
- Robinson, B. and A. Solongo (1999). "The Gender Dimension of Economic Transition in Mongolia," in F. Nixson, B. Suvd, P. Luvsandorj, and B. Walters (eds.) *The Mongolian Economy: A Manual of Applied Economics for a Country in Transition*, Edward Elgar Publishing, pp. 231-255.
- Veblen, T. (1902) *Conspicuous Consumption*. Available at: <https://sourcebooks.fordham.edu/mod/1902veblen00.asp>.